

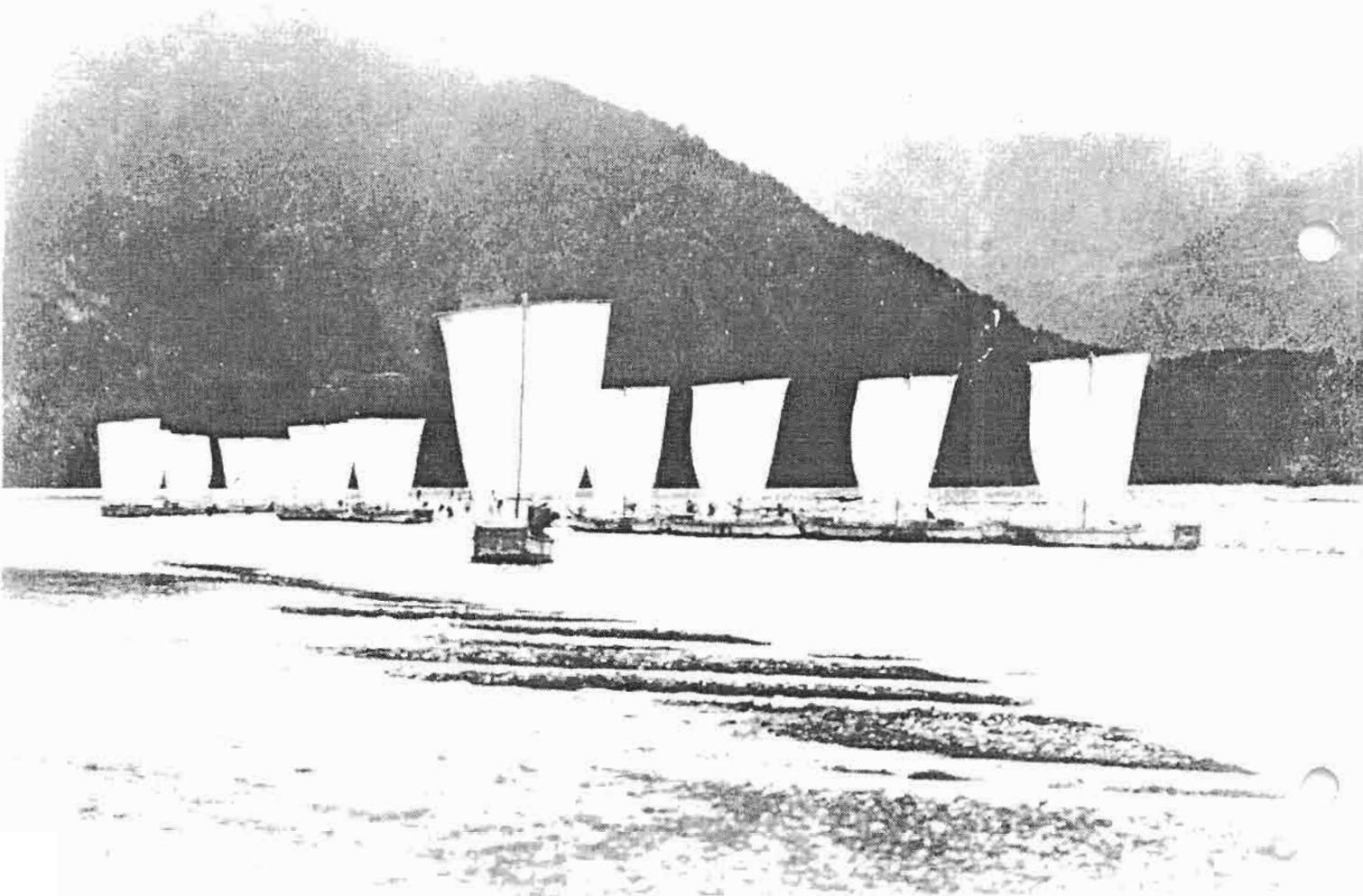
(1)

なかかわねふるさとうしん=43= 平成8年12月2日発行

# 中川根ふる里通信

## = 第43号 =

編集・発行・モアラブ中川根  
連絡先 TEL 0547-56-0015  
静岡県榛原郡中川根町上長尾  
859-6  
中川根ふる里通信係  
TEL. 0547-56-0015  
郵便振替口座 00870-4-81556



水川前の大井川に集まった高瀬舟  
近代大井川の貴重な記録として様々な写真集  
などに載せられております。水川の鈴木貢さんの  
お文様 鈴木利三郎さん(鈴木写真屋)は、半ば  
独学で写真技術を修得された、と言われております。  
大正10年前後の風景です。

元閑院宮春仁王殿下

御来町とお手植の木犀



退出一章

昭和四十四年十月、當時中川根町郷友会の理事であった西村弘君（故人）より役員会の要請として町慰靈祭参列の為元閑院宮春仁王殿下の御来町を交渉する様依頼を受けました。

何とか出来るものなら、と思ひ開院様も全国近騎会に出席を置かれているので、東京都新宿にある近騎会事務局に問い合わせたところ、「直接申込みは出来ない」とのすげない返事であります。

尚諦めず八方手を尽した結果、元三笠宮殿下のお付武官であつた鈴木勇元大佐が、陸士の同期であり親しい間柄との情報を得て、この方に詳細な書翰を送り突破口を見付ける事にしました。

暫くして案するよりも易く「殿下は駿遠地方には、ことの外御関心が深く御快諾なられたので早速責任者を連絡の為差し向ける様に」との返事があり急速に話が進展してゆきました。

折返し中川根町勢要覧その他の参考書を送り、昭和十四年十一月六日高畠町長と郷友会副会長酒井淳平氏を案内して小田原の御殿へ伺候致しました。

しさ面会して見ると昔の巣めい、お姿はとゞへやら  
非常に気さくなお方で矢継早は御下間に心惑いながら  
も、よかつになあ」と安堵の胸をなで下した次第でした。  
十三、十四日の御来町も決り秘書や其の他の打ち合せも  
終つてよいよ責任の重大さに身の引寄る思いで御殿を

退出しました。  
越えて十一月十三日いよいよ閑院様を迎える朝が来ました。雲一つなく晴れわたり、今日の佳き日の兆の如く思つた。高畠町長、小川郷友会長、兼松遺族会長其の外と三台の車に分乗して焼津インターに出迎えました。鎧綜する車輦の中に目印の近騎の槍旗が見え、元気な閑院様のお姿が見えられました。躊躇する、ことなく御先導申し上げ、島田市を過ぎて川根街道を一路北上し、役場にて小憩の後、一気に「山犬の段」に向いました。  
大札山南側の燃える様に美しい紅葉眺めながら暫しの休憩をとりますと、閑院様は地図を御覧になられ特に京丸方面に関心を寄せられ、双眼鏡をお手に、その昔の安倍京丸ルートに想いを走せられたのではないかと御希望により千石平に登ることになりました。  
一同バスに乗り、千石平の登り口まで行きました。上も下も峨々たる岩山、千尋の谷、わすかに沢沿いに付けた足くぼだけの径を岩角に掴まり、木の根に縋りつつ、一步一歩石平を目指して攀じ登る。閑院様も一生懸命、さすがに汗びっしり、そもそも間違があってはと付き添う筆者も汗たく、時には手を取り足を押えての大奮闘、登ると約四十分、漸く「鋸峰」に到着した時は既に夕日が西の山端に迫っていました。



「これが有名な鋸峰です。岩が鋸の刃の様に起伏して、その上を獣道が通っている。この径が蕎麦粒山より戸中山へ奈良代山へヒヨウ峠へ信州大河原に通ずる昔の信州ルートです。千石平まであと十五分位掛ります」と申上げ、暫く休憩する、と、一気に至極御満足の面接でした。

内心帰り時間が心配になり時計ばかり見ていると、やはり気になつたのか高畠町長が来て耳打をして、「急がない」と林道まで下りぬうちに日が暮れるから引返す様に引導を渡してくれとの事、やむなく閑院様に「切角鋸峰まで登りあと一息で千石平ですが、御覧の様に日暮れが迫りましたので、誠に残念ですが下山する事にします。どうかもう一度機会を得て登って下さい」と一気に



昭和44年 11月12日午後4時30分

漸く鋸峰に到着され休憩中の風景

右より 高畠町長、閑院様、筆者高本氏  
山下務課長

申上げますと、閑院様も「え、又来ます」とあつたり了承され急據下山となりました。

さすがに山育ちの一行、下ると足が早く忽ち影も見えない程先を急ぎます。しかし閑院様は登る時よりも更に大変、一番後になり慌てられるのと前に立ちはだかて、一歩一歩には手を取り足場を造りつつ、ゆっくりゆっくりと漸く林道の見えるところまで来た時は、二十五、六人も居た一行は遙かな林道上で固唾をのんで唯見ていてだけ、なかよく見えていて遠い林道に着いた時は、人顔も解らぬ程宵闇が迫っていました。「あ、お怪我がなくてよかつた」と安堵感に全身の力が抜けた思いでした。

後は一路梅野屋旅館に直行、午後七時頃無事到着、

歓迎と慰労を兼ねて町長以下三十余人の会食となりました。

「金枝玉葉」の御身、始めはどんぶりの水で杯を洗つてはお返しする慎重さでしたが、酔が廻るにつれて、俗人と全く変りなく、うち解けられ、果ては座席を離れて下座に座り動こうとしない。生れて始めて上下のない平等の宴席に会えた、と大喜びでした。

秘書も聞きしに勝る酒豪に驚き、酔つた様子もなく立ち上り、明治天皇御製の歌を朗詠しながら一差舞つて喝采を浴び最高の盛り上りの中、小川郷友会長が梅野屋の「半てん」を裏返しに着て禿げたおつむにハイヒールを縛り着け「しゃもじ」を持って現われ、おもむろに「お祓いの式」を披露しました。その真面目くさった顔、道に入つた仕草に一同大笑い、閑院様も遂に腹を抱えて大笑い、両役者も顔負けと後日折に触れては話題にのぼつた、と秘書の便りにあります。

明けて十四日は雲一つない素晴らしい秋晴れ、長尾川の上流に名残りの紅葉が美しく照り映え、靈苑は大勢の参列者で埋まりました。やがて閑院様をお迎えして、

莊厳な慰靈祭が始まりました。

朗々と慰靈の言葉が長尾川の静寂を破り、靈苑は厳肅な雰囲気に包まれていきました。やがて、代表の献花も終り、閑院様より遺族に対し、大要次の様な激励のお言葉がありました。

「かつての戦争は無意味ではなく、従って戦死者も無駄ではなかった。親族を国家に捧げられたことを誇りにもって健康で町の発展に尽して下さい」と挨拶され例年ない盛大な慰靈祭を終了しました。御帰還経路は御希望により、静岡街道を山越えするところになり、藤川を経て小井平小川与平氏の受賞茶園

にて最後の記念撮影をなし、ここで一般のお見送りの方とお別れして、後は町長・郷友会長・遺族会長・筆者の四人にて静岡インターマでお見送りしました。

小長井を経て六百年前の安倍ルートを一路富士城に向い、富士城の跡にて下車され、再びは訪れる、とはないであろう川根路の山々を地図をお手にしながらしげしげと眺められました。

博学の宮様のこと、その昔、六十年の長きにわたり全国の人々を巻き込んだ南北朝争乱の中に、宮方の武士や天台宗山門派の僧兵が南朝の再興を夢見つつ、山伏姿に身をやつし、大河原——ヒヨウ峠——奈良代山——戸中山——蕎麦粒山——板取山——千頭——安倍城と山岳ルートを唯一の連絡としつつ遂に悲惨な終局へ追い詰められていつに南朝の末路に想いを走せられたことがありましょう。

秘書の話によれば、閑院宮家の血筋は南朝の直系として代々十六枚の菊の文章を許され現在に到っているとのことで、第百十三代東山天皇第八皇子直仁親王を祖とし、美仁——孝仁——愛仁——載仁——春仁となり、以後、後継嫡嗣がない為、春仁王殿下が南朝最終末裔になるとの話でした。御来町を二つ返事で快諾され、又、険しい信州ルートを鋸崎まで攀じられた御心情を推察申上げ入替の及ばぬ人のためにほろりとさせられた次第であります。

西の山に傾いた夕日を浴びながら山岳に就いて二、三の御下問があり、晚秋の川根路を惜しまれつつ、車上の人となられ、後は一路静岡インターマ直行、最後のお見送りを申し上げた次第でありました。これが夫々の人の

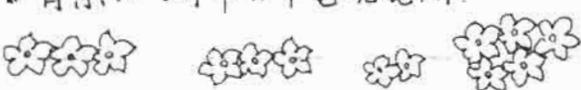


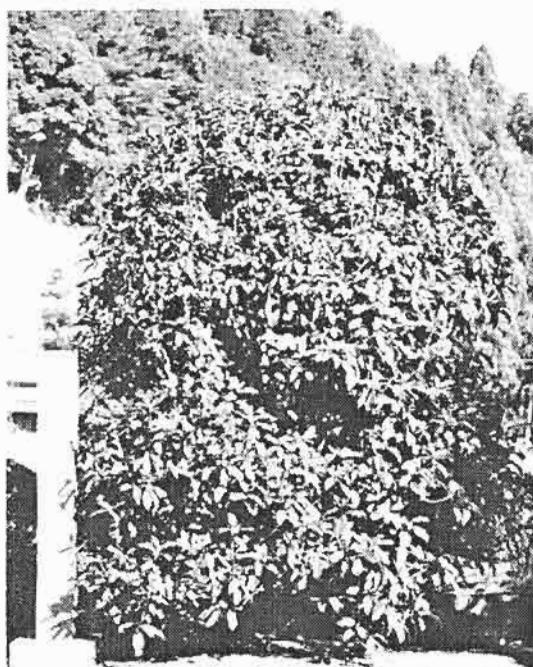
昭和44年11月14日午後3時頃

小井平小川与平氏の農林大臣賞受賞茶園

にて記念撮影

左より、高田一夫氏、閑院様、小川与平氏、  
高畠町長、筆者、小川郷友会長、  
徳島町議会議長、諸田助役、酒井郷友会  
副会長。  
\*背景は崎平の中電発電所。





平成2年3月17日建立

「元閑院宮春仁王殿下お手植の木犀」  
の標柱と27年目大きく育った木犀の木

平成8年12月17日 中川根町藤川四丁目 高本鷹一

久古からの夢と消えゆくうつてよの  
あゆみの一齣 ここに留めん

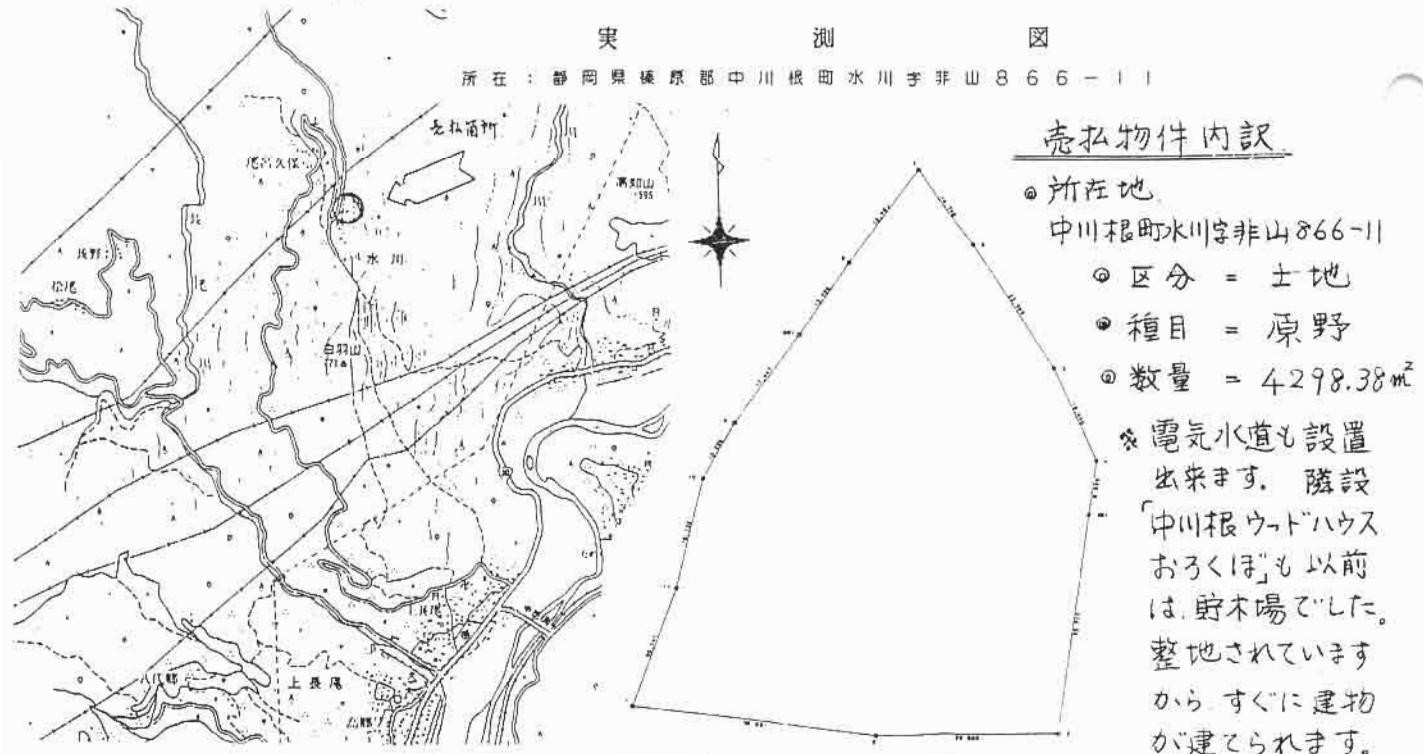
永遠の別れとなつたわけあります。  
歳月の流れは早くあれから二十七年。高畠町長、小川  
郷友会長、兼松遺族会長も酒井淳平様も皆んな世を  
去られ「え、又来ます」と再来町を約束された閑院様  
も昭和六十三年六月御他界なされ、当時の直接関係者  
は筆者一人となりました。やがて生き証人は木犀だけ  
となる事でしょう。

遠く過ぎ去ってゆく中川根町の歴史の一齣として後世に  
残していく。郷友会小川安吉、ハ木伊三郎、坂本茂、中道定平、  
高畠節二、山田隆一、藤田寿一、歷代会長以下七氏の御賛  
同を得まして、「元閑院宮春仁王殿下お手植の木犀」と  
命し、記念標柱を建立して永く御来町を記念した次第で  
あります。

## 尾呂久保上にある千頭営林署貯木場が公売されます。

くわしい内容を知りたい方は、静岡県榛原郡本川根町千頭980. ☎ 428-04

千頭営林署に問い合わせ下さい。TEL. 0547-59-3151





「史書」に出てくる

## 「水川郷」について

細田洋司

今から四百年くらい前、水川区北部の川原は（対岸は徳山区正島）、武田・徳川両軍の人質や、物資の交換・売買地帯に指定されており、非戦闘地域であったといわれます。（現在の朝鮮半島における板門店のようなものといえましょう）

水川の集落は、大井川の右岸沿いに細長く位置しておる。地元では北部（上流部）を上村、中部を中村、下流部を西村と呼んでおります。

水川上村から対岸正島を望む。

水量がめっきりへてしまつて、天下の大井川も歩いて渡れますし、のどかなたたずまいですが、その昔、血生ぐさい取引きが行われていた……その後も渡しは関所の役目もしていた……表紙高瀬舟、荷、とうとうと流れる大井川に、奥山の木舟が浮かぶ……歴史の重みを感じます。

先にあげた非戦闘地帯はこのうちの上流部、上村の川原がその中心であったようです。

「史書」に（「宍山信君条書」……友野文書）

「一、出合の様子、償錢（まよひせに）の取替わりのことく水川（中川根町水川）の郷において、互に河端へ出合い商売すべし。」

二、敵方（徳川方）より（鉄砲）並びに鉄、相違なく、これを出し候わば、三百足、三百足の夫馬を遣わすべきのこと。

とあり、またこれを半手において商売のこと……と記されてあるとのことです。

これを、解りやすく言いかえると、次のようになります。

一、水川郷の河端は、戦国時代に大井川右岸の重要な渡船場であった。

二、永禄十二年（一五六九）に今川氏が滅亡したのち、大井川左岸（駿河側）は武田領に、対岸の水川側（遠江側）は徳川家康が押えることになった。

三、「史書」の元である宍山信君は、武田の武将で江尻（現清水市）に城を持ち、駿河地方一帯を支配（支配を任されて）していた。（一五七五～一五八〇）

四、「出合」とは、双方が会って取引をすること。

「償錢」とは弁償金のことといい、この場合は双方（敵味方）の商人が、この川原で仲立て、取引金をとり

交して人質や生け捕りの者を取り戻していたが、その時の「金」のことをさしているものと見られる。

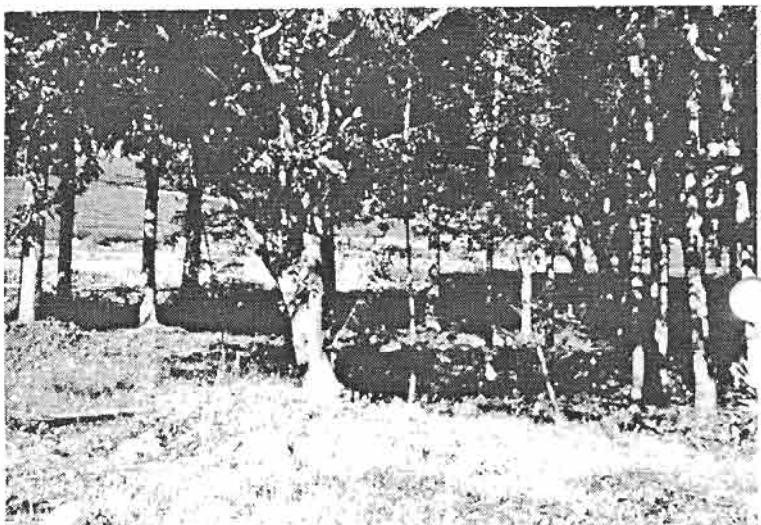
五以上のところから、武田方は從来行われてきたこの水川川原での取引を利用し、敵方（徳川方）の商人から大量の鉄砲と鉄を手に入れたい。しかし、商談がうまくまとまれば、夫馬（この意味不明）を二百～三百ほど出すつもりである……。

であるから、いつものように駿河側（徳山区内正島）から大井川を渡って、徳川方の水川の川原で取引をするようになる。といつてるのである。

六、しかも、この商売は「半手」において行うことある。「半手」とは、敵味方どっちつかずの地域を意味する言葉とされているが、転じて、武田・徳川のいずれの側にもつかない（といふことは、どちらにも雇われて夜討し、強盗などをするととも意味する）悪党のことを指すもので、時に応じて立場を変える戦場の商人たちのもう一つの呼び名でもある。

つまり、「半手」とは「いくさ」に乘じて大もろけをたくらむ、「地侍・土豪兼死の商人」たちの総称なのである。

水川の川原がこのような取引の場所であったことはまさに驚いたが、水川の河端には正式な「字名」として「桶揚場」という名前の土地が現存してあります。（何人の所有者を経たことと思われますが、現在私の家で所有している大井川の川岸の畠が、その桶揚場の土地であります。）



珍しい名前がつけられていたので、土地の物識りたちに聞いたところ、大井川を渡るのに舟は禁止されていましたため、この桶を川にこの土地を使つたからだ……というふうでした。

少し、想像を逞しやう致しますと、戦国の時代はともかく、後世・徳川政権が確立しますと、幕府は対岸の往来を禁止したものと思われます。しかし、この地方では相変らず物資の交易など、幕府の目をくぐって対岸との取引を続けたものと推測されます。このため、「これは舟ではなく、桶です……」といつた言いのがれ（詫弁）をしながら、桶舟による闇の渡河往来が公然かつひそやかになされた、と見るのが正解であるような気が致します。

「サギ（鷺）をカラス（鳥）」といいくるめるような論法が取締の役人等を相手に、たびく繰返されたのであろうか……などと考えますと、適当にお上に反抗しながら、自己の利益を手に入れようとするしたたかは地域の土豪や百姓の性根がうかがわれ、なにやら、おかしさ同時に小気味のよさといった感じさえも湧いてくる

ことを禁じ得ません。

それにしても、ふるさとの水川が、戦国の世において、重要な渡河点であつたばかりでなく、人質の交換や物資の売買といった、「交易の場」としても「認知」されていた、ということは、それから数百年の時間が過ぎていると、いえなんとも言えない感慨に、うたれるものがあります。

人質の中には武田方の高貴な姫君がいたかも知れないし、徳川方の若武者もいたかもしません。

また、近郷近在の農家の若者や娘たちをはじめ、老人や子供たちなど、数多くの人びとが、「半手」と称する商人たちの売り買いの声につれて、一喜一憂しながら大井川を西へ東へ運行されたりであろうし、話がまとまらず、家族や肉親たちの嘆きを背に再び敵方へ拉致された者もたくさんいたのではないか。



この地区の風景は、今も昔もそれほど変わっていないと思われます。両岸の山々の緑はあくまでも濃く、穏やかなたたずまいの景色の中で、大井川の激流の音だけが高かつたものと思われます。

そんな平和に見える山峡の小さな川原で、このような生き生き取引が展開されてきた、という、とを思いますと、「時の流れ」の重さというもの、そして、又、「歴史」というものの「非情さ」というものを感じずにはいられません。

かつて、今川家が滅ぼす折、最後の当主といわれた今川氏真が、武田方に追われて大井川を渡り、遠江の掛川へ奔ったときにも、徳山から水川へ逃げたであろうといわれているそうですが、このことは、古くから、この大井川渡し舟ルートが存在していたことを物語るものといえましょう。



東海道が「表街道」ならば、こちらは「裏街道」になります。うか。

こんなことを考えますと、ふるさとの歴史も、戦国の時代もまた、別の視角から観る、とができます。

平成八年十月記 德山在住

参考文献

「さくわう 雜兵たちの戦場」

藤本久志著

(朝日新聞社刊)



## やはり 気になる 川根町震源の地震のこと。

平成8年10月5日 午前9時35分ごろ 震度4(川根)

平成8年10月6日 午後9時55分ごろ 震度3(川根)

平成8年11月22日 午前8時3分ごろ 震度1(川根)

\* いずれも震源地は 北緯35度 東経138度10分だという。

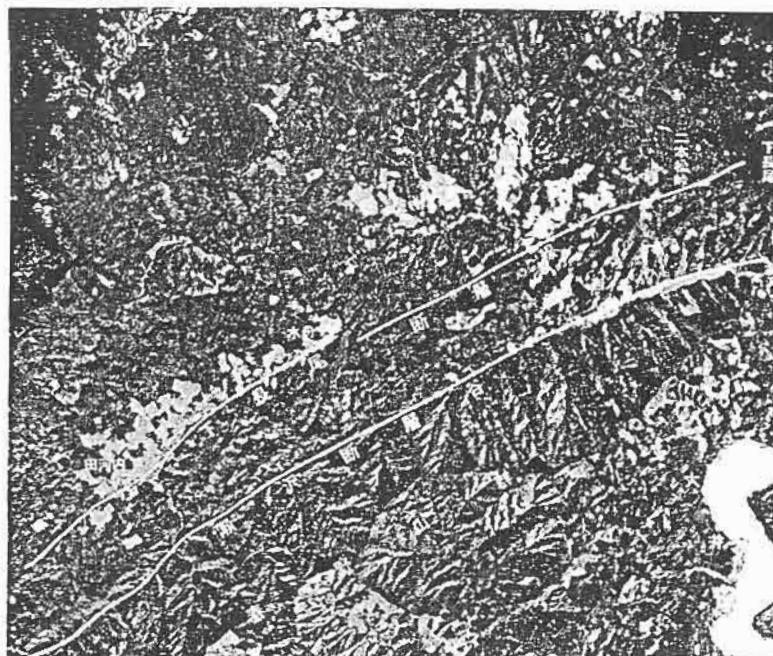
10月5日も6日も地震発生と同時にテレビ全国放映が成された為、安否を心配する電話が諸方から届きました。ニュースや新聞の見解が、地元民にとっては、今一、気になるところです。その時の様子などお知らせします。

\* 10月5日、6日共縦揺れで、いきなり本震だった為、震源地は近いと感じた。揺れた時間が短かった為、屋外ではほとんど感じられず、家の中では「あっ、地震だ」と立ち上がった時は終っていた。この様な規模でした。

\* 北緯35度、東経138度10分の位置は、川根町垂間下、竹島の東の山の中だ、ということです。震源の深さは30km位。

\* 北緯35度線上の中川根の位置は久野脇(三津間)を通っており、地震計設置、観測地点の川根町より、ずっと近くに震源地があることにります。又、同線上の春野町地内は、横揺れが“はげ”しかったと聞きます。

\* 内陸部の地震だから、近い将来発生が予想される駿河湾を震源とするマグニチュード8クラスの大地震とは無関係です。との地震学者、研究者の見解を期待したい、ところで“ですが、むしろ、東海大地震と関係があるのではないか”との見解に、やはり気なるところですか。心の準備をおこたらす”予知型、直下型を想定した地域防災訓練に励み、家具の転倒防止、など、



身近に出来る事から実践して行きたいものです。

\* そして出来るところは、

予想される大地震も、その他災害も、当地区はもとより、地球から無くなつてほしいと願います。

左図は、中川根から春野町にかけて繞いている断層線。

右下の大井川は、西地名前、

瀬沢断層谷上に境川。

浅井治平氏著、「大井川とその周辺」より

## 徳山神樂が県指定無形民俗文化財となりました。

10月10日、徳山神社拝殿にて、県指定記念報告式もかねて、

盛大に、きらびやかに舞われました。



座前い式。=神樂舞奉仕者全員で行う神寄せ儀式



川夏の舞。神を持って行う悪魔払いの舞



荒神の舞。かまびの三神を擬したもので、火の守護神をあがめる舞



五体龍の舞。女の子五人が舞う。木、火、土、金、水、の五神の親和を表す舞



八幡の舞。四人が桃の木で作った矢を五方に放つ魔除けの舞。放たれた矢を拾って家の入口に置けば「病魔除けにな」という。



湯の舞。湯立神事の湯伏せの後に、湯を浸したせんと薬束を交互に持って舞う。この湯が身体にかかると厄除けになるといふ。

駿河徳山盆踊「ヒーヤイ踊歌」(寺田 力著)

発刊を祝して 推薦のことば

かわり等について比較考証されたものは殆どありませんでした。

## 出 版 物 紹 介

徳山古典芸能保存会会長 長浜 寛二郎  
 「徳山の盆踊」は、昭和六十二年国指定の重要な無形民俗文化財になりました。著名な民俗芸能研究家である本田安次氏は、「徳山の盆踊が、国指定になったのは、ヒーヤイ踊が主であり、踊も挿入されている狂言故であります。国指定というのは、有形でいえば国宝ということであります。」と述べられています。

しかし、今まで多くの「ヒーヤイ踊」についての論文・著作等は、いずれも踊の芸能や歌謡の紹介・説明にとどまり、「ヒーヤイ踊歌」の個々の詞章・意味・典拠・他の芸能・歌謡などとのかかわり等について比較考証されたものは殆どありませんでした。この著作は、本会ヒリたしまでも誠にあります。

徳山古典芸能保存会といたしまでも、「徳山の盆踊の体系的な解説書がどうでも必要である」と、事あるごとに話題になつてまことにしたが、今日まで実現することができませんでした。この著作は、本会ヒリたしまでも誠にあります。

かたいことであり、今後「徳山の盆踊」の公開・顕彰のためにも、多くの方々に読まれ、その価値を理解されるための大資本に役立つものと信します。



購入ご希望の方は  
 テレ428-03 代金 1,000円  
 静岡県榛原郡中川根町徳山1068

寺田 力

TEL. 0547-57-2687.

又は、中川根ふる里通信係まで  
 お申し込み下さい。



東京のかたすみから (16)  
◆ テレビの始めから終りまで

## お笑い四方山話 その一

渡 遠 實 夫



先般の新聞記事である。プロの野球審判労働組合から、「プロ野球珍プレー・好プレーなどの特集番組を放送する時は、審判を笑いものにし、審判の権威と信用をおとしめるような珍プレーや過剰演出は自粛して欲しい」とテレビ局は要請された。そんなことをやると「審判の家族までつらい思いをする」とつけ加えられている。

テレビ局側も「もう審判殿を笑いネタにはいたしません」、「審判にやさしい番組作りを進めます」とテレビ局としては大変すなおな態度で受けた。それはテレビ局自身にも、いろいろあって、お互いに脇に傷をもつているからではないだろうか。

さて、今回は私の在職中に、経験したり耳にした面白いできごとにについて述べてみたい。

スタジオでは、照明がないとテレビ撮りは出来ない。今のように感度の良いカメラがなかった時代の話。いわゆ

るアイコノスコープカメラの時のことである。一石ルックスという大きな照明で被写体を照らしたので、出演者はもちろん、スタッフも大汗をかきながら番組作りをしたものだ。そんなわけで、テレビ放送の初期は、熱さの点で、十五分番組が限界ともいわれた。

番組制作中、スタジオの温度がぐんぐん上り、出演者やスタッフがドアの金属の取っ手に触ったら火傷やけどをしたという話も聞いた。

汗かき役者には、タオルを持って汗を拭きとつてやるマネージャー兼汗とり役がついていた。裏方である道具、小道具、美術、照明の人たちは、本番前の作業中に、夏期でも冷房を入れてもらはず、大汗をかいて頑張っていた。

開局当初の昭和三十四年頃は、昼番組が終ると、夜番組が始まるまでの間、四五時間放送はされなかつた。やがて経済成長期を迎えて、テレビは飛躍的に普及し始めた。受像機は作れば作る程売れる時代になつた。テレビメーカーは昼夜を徹して製作に励んだが、作つたテレビを出荷する前に、どうでも、テレビ放送を受けた間違ひなく映るかどうかをテストしなくてはならない。まだ白黒の時代であつた。

ところが、大切な午後の時間帯に放送を休まれてはどうにもならない。メーカー側からのお問い合わせを受けてテレ

## 審判殿 笑いものに致しません

プロ野球珍プレー特集  
民放TV5  
▼要請に配慮放映カットや過剰演出避ける

読賣新聞より  
平成8年10月29日(X)



れるというわけである。それを撮影して放映しようといふことになった。

金魚鉢を五百ワットの電球の前に置いてカメラで撮影し、放送を始めた。金魚は勝手に泳いでくれるし、見ればとても美しい映像になっていた。午後の放送は金魚にまかせて”と、別室で休みながらテレビを観てみると、急に金魚がひっくり返って、横腹を見せ始めた。よく観ると水面から湯気らしいものが立っているではないか。驚いたが、放送中のひとではあるし、静かに近づいて鉢に触つて見ると、なんと温水に変つてしまつた。

うかつにも照明のほんどうが（ハ六、バセニト）熱に変換される、ということを失念していたのである。金魚にはまさに氣の毒なことであった。その後、生きものはやめにして、止むを得ず静止画のテストパターンだけにした。

またある時、ドラマを放送中、名前を字幕カード（ハガキ大の厚紙でテロップと言う）で出していたら、急に煙らしいものが立ち上り、間もなく名前が消えてしまつた。驚いてテロップ装置を開いてみたら、テロップは黒焦げとなり、カールして文字は読みとれなくなつていた。原因は照明の熱を吹き飛ばして冷却するための送風機の故障とわかった。かようにテレビ創成期の大先輩たちは照明の発熱には大変苦労した。

テロップで思い出すことがある。私の義兄高畑平四郎が中川根町長の頃のことであった。彼は予算要求で上京した。政府と折衝中の様子がNHKテレビで放映されたが、その時のテロップが『中川根町長』ではなく、なんと、岐阜県なんとか町の町

長になつていた。

私も開局間際、このテロップの順序を間違え、前述のようないい人達を起したり、上下逆にセットしたために、キャスターの名前がひっくり返つて出たりして大いに慌てた。がもう遅い。このようないい不始末を仕掛けた時は、その都度、上司に「事故報告書」を提出しなければならない。この報告書を書く度に自己嫌悪に陥り入ったものだ。今でもこのようないいミスを思い出すと、当時の情けなさ、悔しさが一緒に蘇つてくるようで、正直なところ嬉しい想い出ではない。

審判の言うように、他人の不幸や悲しみを喜ぶべきではない。本人達は一生懸命やつてゐるのだから。ただし、一生懸命であればある程、悔からみでつておかしいのも人情であるが……。

さて、このテロップも現在は使われなくなり、コンピューターにより電子作画（CG）されるようになつた。各テレビ局共、確認には確認を重ねて放送しているようだが、相変わらずこの種の事故は絶えない。

また、最近のスタジオの照明については、感度の良い半導体（CCLD）カメラが開発され、昔の十分の一（千ルーフス）程度ですむようになつた。色彩効果や精細度、スタッフの安全作業の点などで、これ以下の照明におとす、とは難かしいと言われている。高能力の冷房も完備して、昔のような事件は今はもう起らないようだ。

参考資料.. テレビ朝日社友会報

一九九六年十一月二十一日記

かること夜話

## 初めて電灯がついた時

原田耕作



「忙しい婆をたすけて日暮時

すすけたランプのホヤ洗う日々」

少年の日の私の短歌です。石油ランプのホヤは油煙のために一晩でよこれるので毎日夕暮になると、ホヤを洗つて灯を入れました。私の永くつづいたホヤ洗いは、大正十三年二月二十六日に終りました。

旧中川根村・徳山村共に、電灯の輝いたのは、大正十三年二月二十七日だった。工事の都合で遅れた所もあつたが、それは一部であつた。

商店宿屋等は営業上それぞれ部屋の都合を考えて電灯を取りつけたが、農家では台所に一灯の家が多く、二灯以上の家は富裕な家で数が少なかつた。五燭（二ナワット相当）、十燭（三十ワット相当）、十六燭（四十ワット相当）、二十五燭（六十ワット相当）で、まず十燭、十六燭が多かった。

料金は一ヶ月五燭五十錢、十燭六十二錢、十六燭七十五錢、二十五燭八十錢だったと記憶にある。青年団が電灯料の集金を委託されて毎月団員が順番に集金に歩いた。集金は夜の仕事だった。



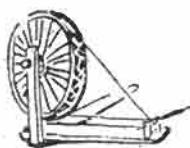
電灯は輝いたが、世の中は大変な不景気で、事業として県で行う砂防工事に住民はこぞつて働いたが、賃金は男が最高六十錢、女は四十錢だった。十燭の電灯料六十二錢を三ヶ月滞納して電線を切られて元のランプに戻らなければならぬ家もあつた。

電灯がともつた当初は、暗いランプに慣れ眼には、煌々と輝く電灯で障子の桟のほりが白く目立つて見えた。最初の内は、電力が強かつたと見えて電球がよく切れた。各地に電球交換所があつて、切れた電球を無料でとりかえてくれた。最初二年位は電球の切れ方が烈しかつたが、その後は余り切れなくなつた。

電燈会社でこんなに電球が切れではたまらないと思つたに相違ない。電力を弱くしたとみえて、光りが少く暗くなつた、とは事実だつた。

石油ランプ時代はどこの家でも灯を消して、就寝したが、電灯となつてからは消さずに就寝する家ばかりだつた。メートル制の今日とは異つて定額だつたら、消して暗くては損すると思つたのだつた。ランプから電灯に変わった当初には、夜中に目をさましてびき起きた人がずい分あつたといふ。

最初一年間位だつたか、午後八時の時報として、一瞬消灯したことがあった。消えてもパツと灯るので、老人のなかには、「あれ、球がとろんでいたとみえて、すぐ灯がついた」といって笑われたり、とろんです

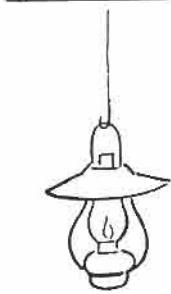


いふといふ事は、まだ電球が熱かつたということで、昔の老人の当然の考え方だつたと思ふ。

高郷に工員教宿所という宿舎があつて、電気工夫と言われる職員が一人家族連れで駐在して居つて、故障、新設、増設、不時の仮設等に応じてくれたが、態度が横柄な駐在員が多かつた。

住民の中には、電灯を一時的に必要な場合があつても、当時は電話もない、乗物もない、テクテク歩いて教宿所までお願いに行かなければならぬ、不景氣で金は無い、悪い事とは知りつつ、盜電して電燈をつける家があつた。これが見つかって大目玉を食い料金を払つたり、こっそり買って置いた器具やコード電球等を持つていかれた。こちらが悪いことは当然であつても、電気工夫の存在は氣味の悪いものだつた。

私は幼い時泣くと、「巡査が来るぞ」、裸でいると「巡査におこられるぞ」と常に親達から言われて居たため、巡査は氣味悪い人間だ、という感念がいつまでもそれなかつた。その巡査と教宿所の駐在員が村で一番氣味の悪い人間だつた。



電灯がついて非常に都合良くなつたが、都合悪くなつたこともあつた。昔から茶期の若い衆の夜這いといふ風習に支障が起きた。昔の農家では戸締りをしなかつた。雨戸は嵐の時にけ出しきしたものだが、錠も掛けなかつた。どうからでも家の内へは入れた。ランプ時代茶期に茶づみ娘達が寝て居る部屋へ忍びに入る事は

半ば公然としたものだつた。それが明るい電灯のため、はいりにくくなつたことは事実だつた。

しかし、夜這いの風習は絶えなかつた。その風習のおかげで、お目出度の縁組の出来た家が川根には可成り沢山あつた様に思う。これを茶縁と言つた。

ランプ時代は、どこの農家でも暗いランプの光の下で草履や草鞋を作り、つづれを刺した。電燈がついて明るくなつたら夜業が出来ると喜んだ。ところが電燈がついたら夜業をやる必要の無い世の中に変つてしまつた。これが文明開化というものなのか、文明とは不思議なものだ、有難いものだと、私は無い腦味噌の頭で考えたことがあつた。

七十三年前の話です。

ふるさと夜話 第十六話 終り

けいしん  
かぶとてつお



## 定期購読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部 テ共 150円

皆様の定期購読がふる里通信の発行を支えます。年間4回の発行(季刊誌)を予定しております。今回で購読の切れる方初めてふる里通信をご覧になられる方には郵便振替用紙を同封致しますから引き続きご購読をお願いします。年間予約600円(150円×4回)のご送金をおすすめしますが3年分位(1,800円)でもお預り申上げます。

購読を止めた時や住所変更のおりも是非ご連絡下さい。

郵便払込通知票 00870-4-81556

加入者名 中川根ふる里通信係

ふる里通信に関する問い合わせ先・及

発行責任者 テ 428-03

静岡県榛原郡中川根町上長尾 859-6

小沢節子

TEL 0547-56-0015

\* 今回記載事項が多かったため  
購読会員名簿は次回号にまわります。  
よろしくお願いします。



ことにはふる里に秋の味覚柿が実りました。甘柿もしづ柿も小さな実の内にカメ虫に食べられてしまったから。赤く実った柿おしゃ柿が見られないので残念です。柿ばかりではなく、トウモロコシやモモ、ナシとカメ虫は何でも食べてしまいます。来年はどうなるのでしょうか。

本格的な寒さがやってまいりました。小春日和のおだやかな日が続いていたので、木枯しが身にこみますね。早、十二月となってしましました。去年から今年と、ふる里通信の発行日がおくれてしまい申しわけありませんでした。今回も、もみじの葉がちる前にお届けしたいと考えていますために、もうほとんど残っていません。来年こそはと誓っております。



ことこの紅葉、黄葉は大変美しく、奥山も里山も見事なものでした。特に桜の葉が真赤に色付いたのを見たのは初めてでした。草木の花が美しく馨しく咲くのは、判る気がしますが、散りゆく葉が何故、やえにかくも美しく、装うのだろう……と思ひました。

今秋も奥大井川根路は、電車、SL、マイカー、バスヒ

秋を學びに来た人達で一杯になりました。我が中川根も、大丸山・山犬段への車で行ける紅葉見物で大変な車の入山量となりました。又、終点の山犬段には写真の様な「山犬段休憩舎」が出来上りました。立派な建物です。いつまでも美しく利用して下さい。登山基地になります。